

医療求める人いる限り… 原発事故で避難せず活動 高野病院（広野町）

「高野病院は福島第一原発から南へ22kmのところにある民間病院。原発事故後、移送することが困難な重症患者をはじめ医療を必要とする人がいる限り避難しないで頑張ろうと決断し、双葉郡唯一の医療機関として医療を提供して来ました。原発事故終息や廃炉に向けた作業をする労働者、東電社員も診察しました。

同病院で働く人たちのなかには避難指示区域内に自宅があるため避難せざるをえなくなり、通勤できなくなったり、事故前と同じ労働時間での就業が困難になる人も出て来ました。看護師・准看護師は、震災直前に33人いたのが11年3月末には14人と半数以下に激減。原発事故前と同じような医療を行うためにはとても人手が足りず、スタッフの確保と定着が重要課題になりました。

県外各地を行脚 長い年月が必要 東京電力に賠償認めさせる

県内にはどこも看護師不足のため、東京、新潟など県外各地を病院スタッフが行脚しました。「1日でも2日でもいいから」と頼み込んできてもらうこともありました。

「とにかくスタッフを休ませる人員が必要でした。来てもらうための宿舎を確保するため、民宿を1カ月借り上げたこともあります。」大震災・原発事故前から最近まで事務長として奔走して来た高野己保（みお）理事長はこう振り返ります。

看護師・准看護師17人で2つの病棟に回復させた内科と精神科を見ていた12年7月、8月ごろが“どん底”。月8日の休みを取れるようになって一息ついたのは同年12月でした。

「原発事故後、唯一の常勤医師になった高野院長（81歳）は、原発作業員や除染作業員の病気、けがなど時間外や救急対応が激増しました。こうした病院の取り組みは「現場の判断で患者の命を守る」ことに成功した例（日本）医師会総会政策研究機構のリポート）と取り上げられました。

高野理事長は「奇跡だともいわれました。しかし、病院経営は今も安心できる状況ではありません。必要な賠償がされずにいる現状を東電が認識し、今後どうしていくか共に考えてほしい。この地域の医療を安定的に継続していくためには、まだ長い年月が必要です」と話します。（「しんぶん赤旗」16年12月18日）

3・11以前、双葉郡には病院が6院ありましたが、現在は高野病院だけです。

高野英男院長は、16年12月30日、家の火事により亡くなりました。

【厚生労働省】 高齢者の医療—長期入院から地域包括ケアへ転換

高野病院—長期入院患者の診療報酬の点数減によって、毎月数百万円の減収

地域が崩壊している原発被災地—何で地域包括ケアが出来るのか！

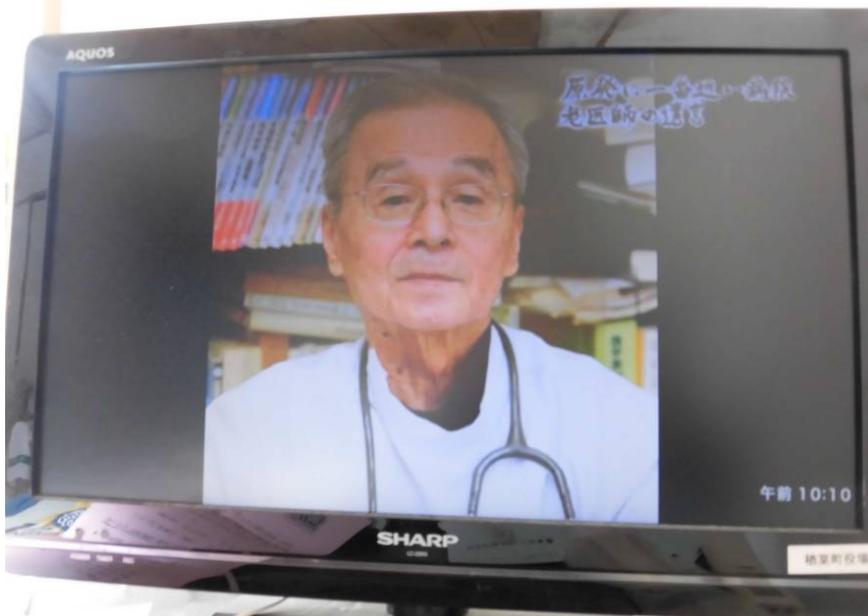
原発被災地—病院無し、医者・看護師等不足、介護施設足りない！

「仮設住宅では死にたくない」—被災者の思い

【原発事故でも避難をしないで 入院患者の命を守った高野病院（広野町）】



【故高野英男院長（NHK クローズアップ東北 17年2月3日 放送）】



【原発被災地を巡るツアー】（いわき駅集合・解散、費用約1万1千円）

（第1回）2月25日（土）～26日（日） 1泊2日

（第2回）4月15日（土）～16日（日） 1泊2日（被災地と桜）

（第3回）4月22日（土）～23日（日） 1泊2日（被災地と桜）

参加希望者は 上田 まで メールか携帯で（☎090-5300-4664）